

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02870

研究課題名(和文) 海外在留邦人の「複言語育児」 アイルランドの在留邦人へのインタビュー調査から

研究課題名(英文) 'Plurilingual child-rearing' by overseas Japanese residents - from an interview survey on Japanese residents in Ireland

研究代表者

稲垣 みどり (INAGAKI, MIDORI)

東京国際大学・JLI・講師

研究者番号：70769786

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアイルランドを調査フィールドに、異文化間移動を繰り返し、複数言語環境で子どもを育てる在外邦人達の育児の営みを、「複言語育児」の概念を立ててインタビューを実施し、個人の主観的な意識というミクロの次元で明らかにした。また、アイルランドの複数言語環境で子どもを育てる日本人の親を対象に現象学の哲学対話のワークショップを実施し、複言語育児を実践する親たちが、「思い込み」や「先入見」をエポケー、つまり判断保留して徹底的に自己を内省したところから取り出す「複言語育児」の意味世界を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「複言語育児」という新しい分析概念を立てて、複数言語環境で子どもを育てる親の育児の在りようを日本語教育の観点から明らかにしたことに本研究の一つ目の学術的な意義がある。また、質的研究の面から、ハイデガーを祖とするポストモダンの相対主義の解釈学の系譜の質的研究とは一線を画した、フッサールの現象学の原理に遡り、個別の語りから普遍を取り出そうとする「本質観取」の試みを質的研究法のアプローチとして取り入れたところに、本研究の学術的な独自性と意義がある。また、学術論文に限らず、現地の親を対象とした哲学対話のワークショップ実践という形で研究成果を発信した点に学術成果の一般への還元という社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research revealed how Japanese parents raise their children abroad from the concept of 'plurilingual child rearing', by conducting life story interviews. Interviews show their subjective awareness of 'plurilingual child rearing'. Also this research organized several workshops for parents who live in Ireland. The workshops were designed based on the theory of Phenomenology of Husserl. In these workshops, parents did epokhe- suspension of judgment- and self-reflected to reveal the meaning of their goal of pluri-lingual child rearing.

研究分野：日本語教育

キーワード：複言語育児 アイルランド 在留邦人 質的研究 ライフストーリー 現象学 本質観取

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とする海外の複数言語環境で成長する子どもは、今まで「日系国際児」(渋谷 2011、村中 2010 他)「多文化多言語環境で成長する子ども (CLD 児)」(真嶋・櫻井・孫 2013)「移動する子ども」(川上 2009)など異なる立場から様々に呼ばれ、研究の対象となってきた。異文化間教育の立場からは、在外邦人の滞在地域の教育環境における親の教育戦略についての研究が北米やカナダ、欧州地域を中心に複数行われている(渋谷 2013、額賀 2013、稲田 2014 他)。これらの研究は、長期滞在型、永住型、国際結婚型、といった親の海外滞在形態の様態による子どもへの言語教育の傾向を分類・類型化しがちであり、ひとりひとりの親がなぜそのような教育意識を持つにいったか、というミクロの次元での育児の在りようは見過ごされがちである。言語教育の立場からは、継承日本語教育の分野で研究が進んでいる(中島 2010、カルダー 2011、ダグラス・知念 2014 他)。「継承日本語教育」は、日本語母語話者の親から子への日本語および日本文化継承の営みを意味し、この分野では親の立場から、日本語を含む複数言語能力を子どもにどのように身につけさせることができるか、といったバイリンガル習得理論を中心とした言語習得論に偏る傾向がある。「継承日本語教育」に連なる研究は、子どもを取り巻く複数言語のうち親から子への日本語継承の行為のみに焦点があてられ、子どもの他の言語との相関が見えないこと、また学習機関での実践研究が主であり、学習機関に現れない子ども達の姿が見えないという2つの理由で、海外の親の複数言語を介した育児実践を十分には明らかにできない。このように、多様な在外邦人の育児の在り様を、類型化をせずに個の次元から捉え直し、その複数言語を介した育児の在りようをより広い視野で捉える視点として、申請者は「複言語育児」の視点を提唱し、多様なライフスタイルを持つ現代の在外邦人達の複数言語を介した言語実践としての育児の在りようを捉えたいとの本研究の着想に至った。「移民の時代」と言われる現代において、自由意思で海外に移住した在外邦人達の「複言語育児」の在りようを明らかにすることは、複数言語文化環境で育つ子どもの背景を理解する上で非常に大切である。

2. 研究の目的

国境を越えた移動が日常化している現在、海外に移住する日本人は増加し、その結果両親もしくは片親を日本人として海外で出生し、成長する子どもの数も増加している。これらの子ども達は日本語を含む複数言語文化環境の中で成長している。在外邦人達は、どのような教育意識のもとに、これらの子ども達に日本語を含む複数言語を介する育児をしているのか。本研究は言語教育を軸に、異文化間移動を繰り返す在外邦人達の育児の営みを、個人の主観的な意識というミクロの次元で明らかにする。分析概念として、育児そのものが言語実践であるという立場から「複言語育児」の概念を新たに立て、従来の継承日本語教育、教育戦略といった学習機関における言語教育にフォーカスした先行研究とは一線を画した立場で日本国外の複数言語環境で子どもを育てる在外邦人の複言語育児の在りようを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の目的は、海外に居住する在留邦人の「複言語育児」の在りようを明らかにすることであり、そのために以下の2つのリサーチクエスチョンを立てた。

- 1) アイルランド在住の日本人の親たちはどのように「複言語育児」を実践しているのか。
- 2) その「複言語育児」の実践は、親のどのような教育意識のもとに実践されているのか。
またその親の教育意識は、どのように形成されたのか。

1)については親達に対する半構造化インタビューおよび育児実践の参与観察を行った。2)については親達に対するインタビュー、特にライフストーリーインタビューを実施し、親達が自分の人生を育児実践にどのように反映させているかを探った。

リサーチクエストごとに、以下のインタビューおよび参与観察を実施した。

アイルランド在住の日本人の親たちは、どのように「複言語育児」を実践しているのか。

(質問紙調査および半構造化インタビュー、育児実践の参与観察)

育児における子どもへの言語の使用はどのようになっているか。

(家庭での言語使用について。それぞれの家族メンバーによる、子どもへの言語の使用状況を詳しくヒアリングした)

学校選択はどのようにしているか。(現地校か、日本人学校か、補習校通学の有無)

その「複言語育児」の実践は、親のどのような教育意識のもとに実践されているのか。またその親の教育意識は、どのように形成されたのか。

(ライフストーリー法インタビュー。インタビュー予定時間は1人あたり2～3時間時間。)

どのような経緯を経て、アイルランドに移住したのか。(外国語学習の経験、国際結婚含む異文化体験等を中心に)

複数言語環境において、我が子に具体的にどのような言語を用い、どのような言語教育戦略を用いて育児をしているのか。またその意味づけは何か。

4. 研究成果

本研究課題が開始した2017年4月より、計6回アイルランドで現地調査を実施した。

当初の研究計画よりは多く現地に足を運び、インタビュー回数も多く実施した。「複言語育児」の参与観察は2回実施したにとどまるが、在留邦人の親たちを対象としたライフストーリーインタビューは研究計画の通りに実施した。

研究を遂行する過程で、二つの大きな気づきと変化を得た。一つは、研究方法であるインタビュー、ライフストーリーを実施していく過程で、質的研究法の根本原理を明らかにしたいという探究心が芽生え、質的研究の理論研究の方に大きく関心が傾いた。その結果、質的研究の理論の源流の一つである現象学の理論への関心が目覚め、現象学を中心とする哲学研究領域の研究会に所属し、質的研究の理論的根拠としての現象学と周辺の西洋近代哲学の研究を開始した。その結果、物事の本質を問うフッサール現象学の「本質観取」の思想に触れ、その手法を活かして、アイルランドの複数言語で子どもを育てる親達を対象に、哲学対話による言語教育をテーマとした「複言語育児」のワークショップを複数回実施した。このワークショップは、研究のリサーチクエストとして「3」で上げた2つのリサーチクエストに関わるものだが、よりシンプルな形で親たちに自分にとっての「複言語育児」の意味と価値を考え、今後の育児の指針の助けとなるように、「複言語育児」の意味づけをさぐるトピックをテーマとした。たとえば、

「子育て」とは何か

自分は、我が子になぜ日本語を学んでほしいのか

わが子に、言葉の学習を通してどんな力を身につけてほしいのか

といったテーマについて、現地の親を対象に「本質観取」の対話ワークショップを実践し、親たちが自分自身で「複言語育児」の意味づけを問い直し、同じ立場にいる親たちと悩みや課題を共有する場も運営し、研究成果を育児の主体の親自身に還元するべく努めてきた。その結果、国際間を移動しつつ複数言語環境で子どもを育てる親たちの「複言語育児」の本質的な意味づけと課題がある程度明らかになった。

このワークショップは、現象学の哲学原理の「エポケー（判断保留）」「現象学的還元」「本質観取」の3つの原理を実践の底板に、複言語育児を実践する親たちが、「思い込み」や「先入見」をエポケー、つまり判断保留して一旦外に置き、徹底的に自己を内省したところから取り出す「複言語育児」の意味世界に注目し、それをワークショップによって間主観的に共有することを目指す。日本在住の外国につながる親たちの「複言語育児」の意味世界の中に、どのような共通性、言うなれば「普遍性」が見出されるかを明らかにすることが本ワークショップおよび本研究課題の目的に変化してきた。言語文化背景が様々に異なる価値観を持つ日本在住の親たちが、子どもに願う複言語の力とはどのようなものか。そこに文化や価値観の差異を超えて、日本のこの社会に生きる市民社会のメンバーとして、共通し得るものはあるのか。それを明らかにし、ではそのような親の願いを実現するためには何が必要か。当初は、たんに「複言語育児」を実践する親の個別の「語り」から、意味世界を明らかにするまでが研究目的であったが、質的研究法によって現象学に開眼したことによって、研究の大きな目的が変化した。今後も、このような視点で研究を続け、アイルランドのみならず他の海外地域や日本国内の地域社会に在住する、ともすれば孤立しがちな子育て中の親達をサポートし、彼ら彼女らが悩みを共有できるネットワーク構築を支援することも、「複言語育児」の研究の大きな意義と考えるようになった。今後も、調査によるデータ収集、分析、論文化といった学術の調査を平行して、特に子育ての当事者である親たちに還元できる方法を考え、実践していきたい。また研究課題の成果としては、学会発表や論文といった学術成果のみでなく、現場で子育ての実践にあたる親たちへ、科研費の使用を通じてどのように研究成果を還元できるのか、常に考え、実践していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 福島青史、岩内章太郎、稲垣みどり、飛田勘文 2019年3月9日
2. 発表標題 「共に生きる社会」のための理論建築基盤としての哲学
3. 学会等名 言語文化教育研究会第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲垣みどり
2. 発表標題 異なる価値観を持つ人びとが共に生きる「開かれた共生社会」の原理 アイルランドで子どもを育てる親たちの「複言語 育児」を事例に
3. 学会等名 言語文化教育研究会第5回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲垣みどり
2. 発表標題 「信念対立」を乗り越えて「共通了解」の成立を目指す日本語教育の実践 アイルランドで「複言語育児」を実践する親たちの事例からー
3. 学会等名 日本語教育国際研究大会ICJLEヴェネツィア2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲垣みどり/岩内章太郎
2. 発表標題 言語教育を支える哲学原理 現象学の原理と本質観取ワークショップ
3. 学会等名 批判的言語教育国際シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲垣みどり
2. 発表標題 「アイルランド中等教育における日本語の導入 (Post-Primary Languages Initiative, PPLI) が現地の『継承日本語』話者の子ども達の日本語学習に及ぼす影響」
3. 学会等名 15th EAJS International Conference 2017 (ポルトガル: リスボン新大学) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲垣みどり
2. 発表標題 ナラティブ・アプローチを支える現象学的思考の枠組み アイルランドで「複言語育児」を実践する親たちへのライフストーリーインタビューから
3. 学会等名 言語文化教育学会第4回年次大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

博士学位論文 稲垣みどり「『複言語育児』を実践する親たちの意味世界 共通了解の成立を目指す日本語教育の提言」(2018年)早稲田大学、早稲田リポジトリ1 - 215、32689 甲第5543号
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考